

不登校経験者が社会参加するために必要なこととは

- **人間関係形成** 集団生活に適応する力を養う
- **興味のある分野を持つ** 社会の中で役割を持つことにつながる
- **自立心を持つ** 継続的に仕事に就く必要性を持つ

社会参加を学ぶ場所が必要

- **学校**・・・通信制高校 高等専修学校などの教育機関
(全日制の高校への進学は受験の壁がある)
- **フリースクール、学習塾など**・・・NPO団体 個人塾などの支援機関
(自分の生活リズムは尊重される。適応速度がゆっくり)
- **アルバイト**・・・仕事に適応できるのであれば問題なし。
正社員を望むのであれば学歴が必要な場合もある。

高等専修学校とは？

よくわかる高等専修学校

高等専修学校とは？

高等専修学校(専修学校高等課程)は、中学校を卒業したみなさんが、少しでも早く自分の夢や目標に近づくために、専門知識を学べる学校です。

1 学校教育法上の位置づけは？

高校と並び、中学卒業後の進路の一つとして認められた学校です。

「専修学校」とは、昭和51年1月に創設された学校種であり、学校教育法第124条に定められています。「専修学校」は、「職業若しくは実用生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ることを目的としており、授業時数・教員資格や施設・設備などの一定の基準を満たしている場合に、所轄庁である都道府県の認可を受けて設置されます。専修学校には、中学校卒業程度の方を対象とした「高等課程(高等専修学校)」

「高等専修学校」は、高等学校卒業程度の方を対象とした「専門課程(専門学校)」これら以外の教育を行う「一般課程」の3つの課程があります。高等専修学校は、高等学校と並ぶ正規の課程中等教育機関として、高等学校の枠に収まらない多様な教育を行っており、現在約400校で約3万6000人が学んでいます(平成30年度学校基本調査より)。

専修学校の3つの課程の比較

課程名	入学資格	学校の名称例
高等課程	中学校卒業者	○高等専修学校 ○専修学校(専門学校) 高等課程
専門課程	高等学校卒業者	○専門学校 ○専修学校 専門課程
一般課程	学歴・年齢等問わず	○専修学校

文部科学省資料
高等専修学校とは7から一部抜粋

高等専修学校 それぞれの特色

不登校経験者の自立を支える 高等専修学校

多くの高等専修学校では、小・中学生時代に不登校を経験した生徒も学校生活をリスタートできるよう、さまざまな配慮をしています。

高等専修学校は、不登校や中途を体験した生徒のためのセーフティネットとして注目されています。普通科目だけでなく多様な専門科目を設けることで、生徒は自分の希望や適性に合った専門知識・技術の習得に取り組み、学校に通う楽しさを知って、自信を付けていく

ことができます。また多くの高等専修学校で、カウンセラー資格・経験を持つ教員が生徒の生活・学習をサポートしたり、一人ひとりに合わせた時間割を組んだり、柔軟な対応を心がけています。

1 不登校経験のある生徒数

少人数教育で人間力を育成する学校に多くの経験者が集まっています。

生徒数の内訳

高等専修学校の生徒の約2割が不登校経験の生徒です。



従来のあった高等専修学校の、最近の生徒数に對して不登校を経験した生徒がいる割合は、およそ2割強となっています。不登校を経験した生徒にとって、進路の選択肢の一つとなっています。

平成29年度 全国高等専修学校協会「高等専修学校の実態に関するアンケート調査報告書」より、「生徒数の内訳」(全国高等専修学校協会会長196校に調査票を郵送、106校が回答)

高等専修学校の魅力

「個性を活かす教育」に関するキーワード

◎ 魅力として発信すべきと思われるポイント



同等のあった高等専修学校が各校の魅力として取り上げるポイントのうち、「少人数教育」「人間力の育成」は、不登校を経験した生徒にとって欠くべからざる価値です。さらに高等専修学校が、セーフティネットの役割を果たしていると言えます。

平成29年度 全国高等専修学校協会「高等専修学校の実態に関するアンケート調査報告書」より、「高等専修学校の魅力(個性を活かす教育)」に関するキーワード(全国高等専修学校協会会長196校に調査票を郵送、106校が回答)



本校入学生について

本校入学者の多くが美術・デザイン科目等の未経験者です。

未経験者でも自らのベースに合わせて学べる環境を整えています。新入生はもろろんのこと、専門課程2年次編入入学者等に向けても個別に課題対応等をおこない、サポートしています。

本校入学者の約5%が高等学校からの転入学・編入入学者です。

(高等課程基礎デザイン科在校生/令和2年5月調査)

毎年クラスの中に2〜3名、高等学校からの転入学・編入入学者がいます。途中からの入学でも、十分授業についていけるように個別に指導しています。

在校生の約58%は不登校経験者です。

(高等課程基礎デザイン科在校生/令和2年5月調査)

学校そのものが好きではなかった人も、本校の授業カリキュラムや生活環境に魅力を感じ、ほとんどの生徒が毎日自主的に登校し、学校生活を楽んでいます。



デザイン高等課程を卒業すると...

専門課程の2年生に編入できる!

デザイン高等課程2年次生はクラスでは、専門課程2年生へ編入ができますので、本校専門課程へ編入する場合は専門課程2年生へ編入します。デザイン高等課程、専門課程の両課程を卒業すると資格1年分が得られることができます。



卒業後...

中国デザイン専門学校 専門課程 2年次編入

専門課程でさらにデザイン技術のレベルアップを促す

デザイン高等課程 (2年制) を卒業した後、専門課程 (2・1・4年制) の2年次に編入入学が1年分です。

○ 専門課程学科ラインナップ
本課程より別途 募集要項を参照



卒業後の進路

本校専門課程2年次編入
他校 (大学、専門学校) への進学
就職

卒業生が活躍している職種

グラフィックデザイナー
キャラクターデザイナー
漫画家
アニメーター
パタンナー
アパレルショップ店員 など

高等専修学校のメリット

- 不登校や通常教育機関に合わない生徒を受け入れるベースがある
- 卒業後の進路選択は高等学校と条件は同じ
- 全日制なので、社会生活を身に付け適応能力を身につけることができる
- 職業教育が中心となるので、基礎学力で成績をつけられない
- 希望の職種につくことができる

高等専修学校のデメリット

- 高等学校と比べて数が少ないので圧倒的に認知度が低い。（岡山県では3校のみ）
- 認知度が低いので、連携、支援体制が確立されていない
- 高等学校ではないので高校の卒業資格を取るには通信制高校とのダブル通学が必要
- 職業教育が中心となるので、学科を中心とした受験には不向き

高等専修学校独自の連携、支援体制とは？

目標は不登校経験者でも、社会参加が可能となり希望の職種につけるチャンスがあること

3-6 徳島県（担当校：龍昇経理情報専門学校）

文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

高等専修学校の学びの「セーフティーネット」

令和3年度 地域連携委員会（徳島地区）実施報告

開催校 龍昇学園 龍昇経理情報専門学校

1. はじめに

高等専修学校は全国で約400校、約34,000名の生徒が学び、文部科学大臣が認定している専修学校は大学進学も可能である。全国には情報学科をはじめ多数の学科があり、就職も学科にとらわれずそれぞれの道に進んでいる。文部科学省は高等専修学校の位置づけを、学習指導要領にとらわれずたくさんの資格が取れ、多くの不登校生徒を受け入れている学校群としている。まさに学びのセーフティーネットと言えるのではないか。

本事業は文部科学省の委託事業で、3年をひとくくりととらえ昨年度はその3年目であった。兵庫県の学校が幹事校となり、高等専修学校の課題や改善等について検討してきた。本校では「徳島県の高等専修学校と地域との連携の在り方」について検討してきた。今年度は新しく取り組む1年目となり、昨年度までに分かってきた課題「高等専修学校の広報の在り方」についてご意見をいただき、よりよい方法で生徒・保護者に向けて発信していければと考えている。

2. 「高等専修学校の広報の在り方」について

中学生の卒業後の進路選択の幅を広げるために、高等専修学校の「どのような内容」を「どのような方法」で生徒や保護者に周知すればよいか。令和3年度の地域振興分科会で得られた各委員からのご意見を、以下にまとめた。

①中学生は高等専修学校だけでなく他の高校のことも教師が思っているほど知らない現状がある。先日、ある高校の先生と話したとき、「高校で何を学ぶかを知らなくて入学してくる生徒がいる。入学してくるまでに何をどう周知すればよいか課題だ。」と言っていた。龍昇学園の強みは、例えば中学校の時に登校しにくかった生徒が貴校に入学し、学校説明会で多くの中学校の先生方の前で発表している、色々な資格を取得できる、一人一人の生徒に居場所がある、就職に向けた丁寧な対応をしている、蔵本駅周辺の清掃ボランティア活動をしている等、人に認められることにより意欲と自信を持たせることだと思う。どう広報するかについては、生徒や保護者が学校見学に行かせてもらい、家庭的な雰囲気を知ってもらうこと、インターネットを利用した紹介動画等をホームページで発信できればいいのではないかと感じた。

【小川 善弘（徳島市城西中学校校長）】

②高等専修学校は、不登校や特別な支援を必要とする生徒の進路先の一つとして大きな役割を果たしてくれていると思う。生徒が不登校になってから高等専修学校のことを知るのではなく、そうならないうちに知ることで、安心して中学校生活が送れると思う。また、他の高校と比べ認知度が低いと思われる理由の一つとしてクラブ活動が少ないことも考えられるのではないか。貴校でもeスポーツ、ドローン、ものづくり等に取り組んでいるので、そういったことや学習する内容を生徒や保護者がもっと知れば興味関心を持つと思う。また、「高等専修学校は高校でない」ということを聞くと、自分の中ではインパクトがあり「特別な場所」とい印象を感じる。それがプラスに働くように生徒や保護者の中に残れば良いと思う。卒業後の進路はどうなるのかもわからず不安になってしまうこともあるので、高校よりも専門的な学びができるというところまでイメージが膨

らむ広報ができればいいと思う。

【中川 弥生（徳島市富田中学校教諭）】

③中学校時代に登校しにくかった生徒が貴校進学後、毎日登校して自己実現し、社会に出て頑張っている生徒がたくさんいる。本校では、行きたい学校、行ける学校だけでなく、高校入学後に中退することがないように、生徒にどの高校が最も合っているかも考えながら進路指導を行っている。生徒一人一人に寄り添った指導を行っている貴校についても情報提供をしている。ただ、生徒、保護者に高校へ行きたいという気持ちがあることは否めない。しかし、学校（教師）がもっと高等専修学校の学習内容等について理解できれば生徒は進路選択の一つとしてもっと考えることができるのではないかと。また、少子化が進む一方で不登校の生徒も増加している現状が徳島県でもある。貴校の不登校対策には学ぶべきものがあり、中学校で全く登校できなかった生徒が皆勤で登校している話を聞いたとき、我々の取り組みは何だったのかと思うくらい素晴らしいと感心している。不登校で悩んでいる保護者に龍昇がこれまでに培ってきたことを活かした相談窓口を作ること、龍昇にフリースクール的な中等部を置くことも考えられるのではないかと。

【安西 政和（徳島市城東中学校校長）】

④中学校時に不登校を経験した生徒や特別な支援を必要とする生徒が、貴校を卒業後、社会で頑張っていることを聞く。これからもそういった学校であって欲しい。一方で龍昇の強み（イメージ）を教員が作り上げていることがあるのではないかと。龍昇は経理情報を教えスペシャリストを育てることが柱としてあると思う。そうでない部分がどんどん教師の中で膨らんでいくと違う方向になってしまうのではないかと。また、認知度の観点から考えると、生徒や保護者が進路先として何を目標に選ぶのかを考える必要があるのではないかと。例えば、家業を継ぐルールが敷かれているのであれば家業に関係することを学べばよいが、自分の進路を漠然としかとらえられない生徒はそうでない。時代の変化が速く、5年先、10年先が分からない不透明な状況で、保護者もどうしたらよいのかわからず、普通科高校へ進学し、短大や大学を目指し、高等専修学校が見えなくなっているような気がする。そのとき充実したホームページ「高等専修学校とはどういった学校か、学習内容は、卒業後の進路はどうか、アフターフォローは」等があれば選択しやすい。そして、学校見学に行かなくてもその学校の様子がわかるような工夫、しかも、たくさんある学校のホームページから選んで見てくれるような工夫がある。また、中学校卒業後の進路先の一つとして高等専修学校があることを小学校段階で、児童・保護者・教員に説明することも考えられる。

【杉本 恭介（徳島県校長会会長、徳島市徳島中学校校長）】

高等専修学校には全国組織の高等専修学校協会があり、会長をしている武蔵野東高等専修学校が東京都にある。そこではインクルーシブ教育を行い、生徒たちは切磋琢磨しながら学習や思いやりの気持ちを学び合っている。本校も参考にさせていただいている面はあるが、本校の生徒募集については人的・物的財産を考慮した現状がある。ただ、委員の方々のご指摘やアピールの仕方等を大いに参考にさせていただきたいと考えている。

本校が今まで培ってきたノウハウを生かし不登校生徒、特別な支援を必要とする生徒の受け入れも必要である。広報をするにあたり公立高校と高等専修学校が同等に生徒や保護者に選択してもらえるようになれば、生徒にとって進路選択の幅は広がると考えている。

3. 高等専修学校アンケートについて

全国の高等専修学校で行われている高等専修学校認知度アンケートについて、本校でもこのアンケートを実施するにあたり、県教育長連合会、県中学校長会に了解を得ながら、適切な時期に、県内の公立中学校の先生を対象に実施したいと考えている。本会議では昨年度に他県で行ったアンケート結果をもとに、こうしたアンケート

調査へのご協力を仰いだ。アンケート実施にあたり、回答方法としてウェブアンケートを考えている。QRコードをスマホで読み込んでいただく等の方法で、各項目に回答していただく。すべてに回答していただいても5分～10分でできると考える。

本アンケートに対しては、コロナ禍でリモートの可能性もあるが教育長連合会の理解を得るようにすればよいのでないか、という意見や、用紙でなくクリックするだけで、個人を特定する要素もないので教育長の理解が得られれば進むのでないか、という意見もあった。

実施については、本校で具体案を立てて、関係委員のご指導をいただきながら計画を立てることとなる。

4. まとめ

高等専修学校の在り方や、高等専修学校に関するアンケート調査の実施に関する協議と提案をについて、委員からいただいた意見を以下にまとめた。

①手厚い対応で不登校生徒を受け入れてくれていることに感謝したい。ただ、本来の高等専修学校はいろいろな資格を取り、自分が得意とすることを高められる学校だと思う。不登校を経験した中学卒業後の生徒たちが貴校に登校することに大きな努力をしていると感じる。徳島市には中心部に適応指導教室があるが、生徒の在籍校と連携しながら、例えばリモートが利用できれば進路選択の一つに高等専修学校もあるということを知ることができる。高等専修学校について生徒や保護者の理解を深めるために、今まで以上に広報する必要がある。その方法として、生徒の多くはSNSを利用しているし、中学校では先輩（卒業生）に学ぶ機会を設けている学校もあり、そういったことを利用してもよいのでないか。また、他の高等学校もたくさんあるので自校努力も必要であるだろう。例えば、防犯パトロールや資格を取り表彰されたことをメディアに取り上げてもらうことや奨学金制度や授業料減免のこともさらに周知すればいいのではないか。中学校の教師が生徒や保護者に薦められるよう、アイデアを使い広報していければいいと思う。2つ目のアンケートであるが、市教委は協力していきたい。徳島市ではすべての中学校の生徒が進学しているので教員も協力してくれるのではないかと。ただ、1回で終わるのでなく2～3年に1度くらい継続していければいいと思う。

【松本 賢治（徳島県市町村教育委員会連合会会長、徳島市教育委員会教育長）】

②今までの話を聞いて生徒の進路が多様なことを改めて感じた。まず、周知という点ではマーケティング調査を行い生徒募集しているところが多いのではないだろうか。高等専修学校をどう周知するのかであるが、私も仕事を通して高等専修学校を改めて理解した点があり、保護者も詳しく知らない方が多いのではないだろうか。中学生が進路を決めるとき保護者の考えも大きく、保護者が高等専修学校の仕組みや制度を知らないと誤ったとらえ方をすることもあるのでないか。以前、徳島県の広報を担当したが知名度を上げることは容易でないと実感した。労力をかけ、うわべだけでなく地道に工夫をしていく必要がある。龍昇学園はeスポーツ等の特色ある取り組みをしているので継続すればいいと思う。次に、知ってもらうためにツールはとても大事だと思う。例えばパンフレットを通して高等専修学校や龍昇経理情報専門学校に興味を持ち、理解してもらうためのイメージアップにつながる。パンフレットの内容も教育内容、親しみやすさに加え、生徒や保護者が知りたい情報は何かを知ること大切だと思う。ホームページも情報量、見やすさ、動画の内容等を考慮に入れ、情報発信戦略としてとらえることも大切だと思う。ただ、よく考えないと逆にイメージダウンにつながりかねないので注意も必要だ。

【田上 賢児（徳島県経営戦略部総務課課長）】

【参考資料】

地域連携委員会（徳島地区）実施データ

- 実施日時 令和3年12月20日（月）15：15～16：45
- 実施場所 徳島県教育会館（徳島県徳島市北田宮1丁目8-68）
- 参加委員 松本 賢治（徳島県市町村教育委員会連合会会長，徳島市教育委員会教育長）
田上 賢児（徳島県経営戦略部総務課課長）
杉本 恭介（徳島県中学校校長会会長，徳島市徳島中学校校長）
小川 善弘（徳島市城西中学校校長）
安西 政和（徳島市城東中学校校長）
豊田 勝（徳島市城西中学校教諭）
中川 弥生（徳島市富田中学校教諭）
久次米健一（龍昇経理情報専門学校校長）
横山 鉄也（龍昇経理情報専門学校名誉校長）
久次米健義（龍昇経理情報専門学校副校長）
久次米知英子（龍昇経理情報専門学校教諭）

（以上11名）

3-7 山口県（担当校：立修館高等専修学校）

文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
高等専修学校の学びの「セーフティネット」
令和3年度 地域連携委員会（山口地区）実施報告

開催校 学校法人下関学院 立修館高等専修学校

1. はじめに

この地域振興分科会は全国12カ所で会議を行っております。本校での会議は、今年度はコロナ禍のため1回のみとさせていただきます。

過去3年間の取り組みといたしましては、1年目は下関の各委員の方々にお越しいただきました。そこで、「この会議を広めていってはどうか」というご意見をいただき、その後、下関市・宇部市・山陽小野田市の教員にアンケートをとった結果、特に若い先生は高等専修学校のことをほとんど知らないことが分かりました。今年度は初めての委員もあることから、本校の現状や学校生活の様子をご理解いただくとともに、忌憚のないご意見・ご質問をいただきたいと思っております。

2. 本校の最近の状況について

昨年、全国高校eスポーツ選手権に出場して山口県大会で優勝した時の新聞記事について、この記事を見られた西京銀行の平岡頭取が昨年12月に来校されてeスポーツの部活動見学に来られました。ここで部活説明をした生徒が中学校は不登校でした、という話をしたら平岡頭取は大変驚いておられました。また、昨年以下関市立大学に合格した卒業生3人の座談会での様子や、昨年春に入学した生徒が、テレビ東京で放送された「CHANGE MAKER U-18 未来を変える高校生 日本一決定戦」に出場した時の様子などを見ると、今の在校生が過去では考えられないくらい頑張ってくれていることに気がきます。それに、この地域振興分科会や文科省のオンラインセミナーから、一昨年の本校のオープンキャンパスの参加者が非常に増えたと考えられます。昨年、定員を大幅に上回る受験者が来て、今年も過去最高の受験者数で、2倍以上の倍率が出た学科もありました。

引き続き委員の皆様からいろいろなご意見をいただきまして今後ますます創意工夫をして良い教育を目指していこうと思っております。

3. アンケートの調査報告について

以前の文科省委託事業で、下関市・宇部市・山陽小野田市の中学校教員を対象に行った高等専修学校の認知度調査アンケートの結果をご報告します。「高等専修学校をどの程度ご存じですか」という質問には、4割程度の先生が高等専修のことを理解していないことが分かりました。年代別に見てみると、若い先生ほど高等専修のことを知らないということが分かりました。また、若い先生は半数以上が、（立修館は）大学や専門学校に進学できることも知らないと分かりました。

「高等専修学校についてどのようなイメージをお持ちですか」という質問には、主な回答としては「不登校生徒を受け入れてくれる」「自由な校風」「学費が高い」「専門教育に強い」…などの意見をいただきました。共通して多かった意見は「不登校生徒を受け入れてくれる」「専門教育に強い」「学費が高い」の3つでしたが、「学費が高い」というイメージは間違っていて、立修館は高等学校校学支援助金や授業料減免制度の対象校でして他の私立高校と同じ減免制度です。また、各種減免制度もありますので、入学時にかかる出費はむしろ他の

私立高校よりも安くなっています。現在、約8割の生徒が（授業料が）無償化なので実質授業料払わずに来て
いるのが現状であります。

4. 本校の概要について

高等専修学校の社会的位置づけについて今一度確認したいと思います。すべて高等学校と同種同格です。進
路も、公務員試験・大学進学・就職すべて高等学校と同種同格です。下関市立大学には推薦枠8名あります。

本校の福祉科は、介護あるいは保育の勉強を専門的に行っています。次に高等科は、ファッション専攻と、
きもの専攻があります。ファッションは洋裁やファッションやデザインの勉強をします。きもの専攻はきつけ
や着物を縫うことを専門的にやっています。経理情報科は、ビジネスや商業実務を中心に取り組みます。2年
生になると各コースに分かれてさらに専門的な授業があります。福祉科は介護保育コース、福祉調理コース。
高等科は美容やヘアメイク、コスプレコース。経理情報科はパティシエ、イラスト、声優コースがあります。
それぞれ外部から専門の先生に来ていただいて授業をしてもらっています。こういったことは普通の一条校で
はできないことではないかと思えます。それと、選択授業というものがあって、自分の専門科目とは違う他学
科の授業を受けることができます。

保護者会をやっている、アンケートに答えていただいています。「入学してから今までの感想は？」という質
問に約95%の保護者から「よかった」とお褒めの言葉をいただいております。「学校が楽しいと久しぶりに聞
けた」とか「中学までは行きたくないという態度だったのに今は自分から行くようになっている」といった変
化が見られています。「入学してから良かったこと・嬉しかったことは？」には「次の日に備えて早く寝るよ
うになった」「努力すればよい結果が残せると言って頑張っている」「早く学校が始まらないかなあと不登校だ
った子供の口から聞いた」という変化が見られています。

1年生の宿泊研修についてです。今はコロナの影響で1年ずらしの実施としています。立修館の伝統行事で
銃剣道をしています。静の研修で、夕食を黙って食べて生きる大切さを学びます。理事長の講和・座禅もあり
ます。生徒の感想としては、「最初はイヤだったけど最終的に参加してよかった」という声が多く出ています。

コロナ禍でなかなかできていませんがバーベキュー大会も行っています。これも生徒からの要望で実施して
います。

コース授業についてです。パティシエだったりイラストだったり、ネイルやメイクの特別授業も実施してい
ます。福祉科の調理実習や介護の実習も行っています。

学校行事についてです。修学旅行では、海外編で韓国に行ったり国内編で東京に行ったりします。文化祭で
は、洋裁・和裁の生徒がメインでファッションショーを自らの作品で行っています。また各クラスでの出店や
演劇部の公演もあります。ボーリング大会についても、生徒から声があがり、自由参加で楽しんでいます。そ
の他、クラス対抗で校内バレーボール大会も行っています。

部活についてです。簿記部は今年も中国簿記大会で優勝しました。あとは社会奉仕部やテニス同好会、画像
研究同好会やイラスト文芸部が活動をしています。卒業生の中ではプロになった生徒もいます。園芸部は外の
花壇に苗を植えています。eスポーツ部は今一番頑張っている部活です。ドローン同好会もあります。今年1月
に長府城下町マラソン大会がありましたが、主催者から依頼を受けましてドローン部の生徒が（大会に）行
って空から撮影をしています。地域貢献も行っています。今後はドローンの進歩又は用途も上がりますので活動
的にやっています。他にも、生徒が楽しむのであればラジオ収録などのイベント事も積極的に取り入れていま
す。

5. 生徒の状況と事例について

最初に、不登校から登校できるようになった事例ということで、昨年の入学生の事例を挙げてみます。対象
としたクラスは1年生のクラスです。中学校の欠席状況としては、300日～400日休んでいた生徒が1

9%ずついました。100日～200日休んでいた生徒は6%ずついたのでクラスの半数は不登校でした。そのほか50日以上を含め31%が、学校には行っていただけ支援教室、又は市の特別支援教室で過ごしていたことで出席扱いになっていたため、ほとんどの生徒が通常教室に入れなかったと言えます。

担当教員の教室では、何かあるときによく写真を活用しました。帰属意識を高めるためです。次に出すのがバレーボール大会の写真です。男子が試合をしている後ろで女子が応援している写真です。試合に負けてキャプテンが泣いています。いつもは元気なんですけど緊張から泣き始めて、みんなで称えあって最後には、誰かが「写真を撮ろう」と言ってみんな笑顔で写っています。

2学期の最後にこの生徒たちにアンケートを取りました。「中学校は学校に行かずに家で何をしていたの？」という質問に内向型の生徒は、ゲーム・動画を見る・家の手伝いといった過ごし方が多く、外向型の子はカラオケ・家出などと外で遊んでいた子もいました。次に「立修館に入って登校できるようになった理由は？」という質問には、「学校の方が楽しい」「お互いに嫌な経験をしているので後ろめたさがない」、また「リーダー的な存在が助かる」という意見も出ています。学習面では「基礎的な授業をしてくれるのでわかりやすい」「わからないことをわからないと言える」「馬鹿にしないで最後まで教えてくれる」という意見がありました。

入学後の欠席日数についてです。15日以内、10日以内・5日以内でほぼ8割を占めています。8割以上の生徒が学校に来られるようになりました。しかし、30日以上欠席している生徒もいますので、引き続き支援していきたいと思えます。学校に来られていない生徒たちには、Zoomを使って、そこにいるという印象を与えたりいろいろなことに取り組んだりして、きっかけ作りをしています。

続いて発達障がい改善された事例についてです。中学校からの引継ぎで教育支援計画をいただいております。発達障がいであると認識していました。具体的には、宿題忘れや提出物忘れ、授業中の私語や誰かにちょっかいを出してしまう、関心のあるもの以外への取り組みができない。こういった典型的なADHAでした。しかし、際立った授業妨害や迷惑行為等はなかったため本校への入学を許可しました。

入学後、学習面では、特定の教科で優れた能力を持つことがわかり、保護者や担任の勧めで積極的に資格を取るようになります。結果、卒業までに簿記2級、Excel2級、電卓2級の資格を取って卒業しました。生活面では、学級委員や文化祭実行委員を自ら引き受け学校行事に積極的に参加しました。3年次になると、大学進学のため、苦手科目の勉強に加えて小論文の勉強にも精を出すようになりました。

部活については、1年次から簿記部に入部し、2年次・3年次には山口県代表として中国簿記大会で、2年連続で優勝旗を持ち帰ってくれました。また、新しい部活をつくろうと、eスポーツ部やフットサル同好会の立ち上げに携わりました。この初代部長に就任して簿記部部長と兼任して活動していました。令和元年度の中国簿記大会で優勝の他、eスポーツの国体予選、山口県大会で優勝し、山口放送のインタビューも受けました。これらの活動を通して、中学校からの引継ぎであったADHDの特性が改善されていったのではないかと考えています。

6. 委員からのご意見について

今年度の地域連携員会で報告のあった内容に関して、関係委員からいただいた意見を以下にまとめた。また、報告内容や本校に関する質問等についても、回答し、情報交換を行った。

①私は下関市の教育長ということでいろいろな子どもの学びを扱っていますが、立修館さんにはたいへんお世話になっています。本当にありがとうございます。私が校長のころは不登校の子どもが進路というイメージでしたが、今は聞くところによりますと下関で一番入学するのが難しい学校になっているということなので驚いています。これも先生方のご努力のおかげだと思っております。

そんな中、今のお話を聞いてわが身を振り返って反省しておりますのは、学習面で馬鹿にしないで教えてくれることを聞いて、自分の教え方は、学校に来るのを嫌がっていた子をつくっていたのではないかと反省しま

した。こういう取り組みは教職員全員で共通理解をしているのかをお聞きしたいです。

【下関市教育委員会教育長 児玉典彦 委員】

共通理解については、春・夏・冬と研修会を全教職員でやっています。2つの研修をしていて、1つはフィロソフィー研修会ということで、心の部分をいかに大切にすることということでフィロソフィーと呼んでいるのですが、外では哲学というのでしょうか。京セラの稲盛さんの盛和塾に本校理事長が入っていたことがあり、その教えで、人間として何が正しいのかという考え方を突き詰めていく勉強会を1時間くらいやっています。それと併せて、不登校や発達障がいなど、その時の生徒の状況に合わせた勉強会をしています。学会で聞いた内容を持ち帰ってやったりします。中学校では何か一つでもできないと発達障がいと言われたりします。今の日本は平等にできないと発達障がい、もっと言うとグレーゾーンと言われたりしますが、うちでは、英語・数学はできないけども簿記はできる、パソコンができる、というように何か一つ得意技を作りなさい、そして元気にあいさつができて元気に外に出れば社会ではなんとかなる、というスタンスです。普通高校では英語も数学も欠点とらないように頑張りなさいってなるのですが、高等専修学校の場合は、何か得意技を作って卒業すれば十分ということで応援しており、そのきっかけが簿記であったりeスポーツであったりだと思います。

②前任校でもその前の学校でもずっと私と関わった生徒が立修館高等専修学校に入学させていただいて、成果を出している話を聞いていました。今年度も数名の生徒を採っていただいて、笑顔で校長室に「合格できました」と、ほとんど進学をあきらめていた生徒も来て喜んでいます。今学校で頑張っている姿を見ると非常に期待しています。児玉教育長さんも言われていましたが、私も社会科の教員をやっていて、分からないと言えるとか馬鹿にしないで教えてくれるといったことに私も反省するところがあったのではないかと思いますし、本校の教員でも授業を見に行くと「それは小学校のときに勉強したことだよ」と語りかけている馬鹿にした教員がいるなと感じました。学校に帰ってからは先ほどのアンケートの内容も意識しながら教職員に話をしたいと思いますし、県の校長会にも持って帰ろうと思いました。

昨年度から倍率が上がりまして、それまでは入れた生徒が入れないという現実がありますが、今後定員を増やす予定があるのでしょうか。

【山口県中学校長会幹事 波多野敏郎 委員】

今年も、本来なら立修館が受け入れなくてはならない生徒が受け入れられない状況です。去年までは校長推薦の生徒はなるべく合格させていたのですが、今年は校長推薦が付いていても多くの生徒さんが最初から不合格になっています。そういう状況なので、(定員を増やす考えも)検討できればと思います。

③立修館高等専修学校はいろいろな学校の生徒を採っていただいてよく指導してもらったなと思います。去年から見ていると不登校で学校に来られなかった子どもの報告がありましたが、そういう子が復帰できるような学校として大切な位置を占める専修学校さんだと思います。普通高校に行くときとまた不登校になって就職もせず親から面倒を見てもらって税金も払わない子が、ここに来て復帰して就職して税金を納める下関の子になってくれるというのは素晴らしいことだと思います。人数は少ないですが、もう少し定員を増やして不登校生徒を救えるような規模の大きい学校になってくれればなと思います。eスポーツのほうも国体がスタートした時は工科高校さんが出場し、その後立修館さんが引き継いで今がんばっていることを初めて知ったのでeスポーツの高校ができるということも今の流れかなと思います。

パンフレットにありますけど、学校のインスタとかいろんなSNSにパッと入れるようにQRコードがあれば、(中学生は)1人1台タブレット持っていますので、学校でこれを配ったときにQRコードを読み取るとYouTubeをすぐに見られるのではないかと思います。できるだけ(パンフレットの中に)動画とかを観れるよ

うに（QRコードを）貼り付けておけばいいかなと思います。それと、立修館の生徒以外の文化産業専門学校と福祉専門学校との兼ね合いは、全然かわりがないのかそれともかわりがあるのか、そのあたりを教えてくださいなればと思います。

【下関市中学校長会会長 瀬下信二 委員】

実は本校だけで経営が成り立っているのかと言うと成り立たないです。普通の高校は生徒40人に授業料が3万3千円で1人の先生がつく、というのが経済的に成り立つ経営手腕であります。それに対して本校は20人に1人の先生がついてやるので当然経営としては成り立たない。ましてや私立高校には1人約35万円の補助金が出ますが高等専修は約8万円です。ですから（経営は）成り立たないのですが、なぜやっていけているのかというと、専門科目を専門学校の先生が教えるからです。例えば福祉の授業は福祉専門学校の免許を持った教員が教えます。ファッションについても、きものについても、専門学校の先生が授業をします。ですから（高等専修と専門学校の）両方を教える先生が携わっている形で何とか経営もやっていけています。学生と生徒が関わるのは年に1度の学園祭で、立修館と各専門学校から実行委員を出して会議をし、一緒に開催します。それ以外で立館生と専門学生が関わることはありません。

④高等専修学校それから立修館高等専修学校について、客観的なデータ、そしてエビデンスに基づいた説明をありがとうございます。毎年立修館高等専修学校に合格した生徒がイキイキと通っている姿を見聞きするとたいへん嬉しく思います。少人数制の良さを存分に活かされており、個に応じた取り組み展開されているのが勉強になります。何より子どもたちが所属集団に対する誇りを持っているのが伝わってきます。生徒の希望で制服ができたことがびっくりだったのですが、どれくらいの生徒が制服を着て来ているのかが知りたいのと、こちらに進学して進路変更する生徒がどれくらいいるのか、それから、2年次に選択教科で他の学科の受講が可能だということですがその受講状況を教えていただければと思います。

【山陽小野田中学校長会会長 山本時弘 委員】

まず制服のほうですが、購入する生徒は7～8割、そのうち制服を着て登校している割合は5割いないくらいで、その時の状況で変わります。生徒同士で「制服着ていこうよ」という日もありますし、今は2～3割が制服で登校しています。むしろ今は学校のジャージで来る子が最近が多いです。

進路変更については、3年ぐらい前までは、途中でやめたり、退学になったりする子もいましたし、ついていけなくて通信制にまわる子も年に1～2人いました。本校は通信制とタイアップしています。しかし（辞める子の）多くは、表向きは自分の意志で辞めたという形になっていますが、実際は、人に迷惑かけるから辞めなさい、ってなって他の通信に行くという子が何人かいました。しかし、今年度はそういう子は一人もいません。倍率が高くて選んできた生徒なのか、問題がある生徒もいませんし辞めた生徒もいません。

選択授業はほとんどの生徒が他の学科の授業を受けています。経理の子がきものや福祉を受けたりしています。着物のきつけの資格が取れるのは山口県でうちだけだと思います。実際に経理情報科の生徒が福祉の授業を受けて、卒業後は福祉専門学校に進学した生徒もいます。逆に福祉科の子が、自分は福祉に合わないからと他の分野の専門学校に行った生徒もいます。ですから、立修館ももう一つのよさは、いろんな体験ができることです。メイクとかパティシエとかいろんな体験ができるのが立修館です。（普通高校の）親御さんは高校卒業後に高いお金を払って専門学校に入ったものの、すぐ辞めちゃったというケースが結構多いです。ですから、立修館ではそういう経験をしたうえで、それでもやりたければ東京や大阪の専門学校に行くということを奨励しています。

⑤最初に立修館高等専修学校の説明を詳しくしていただきましてありがとうございます。恥ずかしながら私今

年初めて細かい内容を聞いて、ある程度分かっていたつもりではいたんですが、こんなに生徒が頑張っているんだと、もっともっとここを勧めていければなと思います。

心の支援室は、いわゆる適応指導教室です。本年度は小中学校で40人近い子供たちが通っております。当然不登校であってもこういうところに来ている生徒が救われているなと思っております。心の支援室の実態を思いながらお話しさせていただこうと思うのですが、中学生は3年生が圧倒的に多く、3カ所でやっているのですが、15名くらいおまして、本年度もここ（立修館）を4名受けました。そのほか、双葉（高校）もあれば、山口にできる新しい学校もあります。どうしても不登校の子は普通の高校では人数が多いです。先ほど説明がありましたけども、（不登校の子は）少人数を好みます。そういう学校を選んで行く子が多いです。そのほか通信制もあるんですけど。聞きたいことはたくさんあるんですけど先ほど先生方が聞かれましたから。4名受けて、学校推薦で受験した子は通りました。自己推薦の子は落ちた子もいれば第2希望で合格した子もいて、今しょげていますけど、昨年度の子は、最初はしょげていたのですが、入って「良かった」と聞いて毎日通っていると耳にします。第2希望の学科が自分には合っていると。先ほどありましたように、2年次からコースを選択できると聞いて、もっともっと（今の生徒を）激励してやりたいなと思いました。

中学校には行けなくても、ここ（立修館）に来れば、ほとんど（の生徒が）辞めていないということでイキイキとしてやっているのも、もっと宣伝していきたいと思うし、各中学校にももっと啓発というか広めてほしいなと思っております。

それと、私自身も、（立修館は）学費が高いというのがありました。私は5年目ですけど、1年目2年目は（立修館は）高いと聞いていました。どうしてもここ（適応指導教室）に来ている生徒の家庭は、経済的にいろいろな事情があって裕福ではないので、どうするか、受験してみるかと決めるときに、きちんとシデータがなかったのですが、今後は立修館を教えるときには学費の面でも啓発活動をしていこうと思いました。

【山陽小野田市中心の支援室支援員 山本秀逸 委員】

学費が高いということについてですが、実は2年前から、学費を下げることはできないので、そこで作ったのが、いろんな学費を下げる制度で、最大18万ほどさげられるようにしてあるというのが今の状況です。下関の某私立高校では、制服が強制ですから、夏服と冬服で18万円かかると。うちは4万とか5万円です。ですからトータルで計算するとむしろ地元の私立高校より安いのが今の状況です。

それと今第2希望でしょげていたという話でしたが、先ほどの高等科の生徒たちはほとんど第3希望です。第2どころか第3希望ですから、しょげるどころか今元気に来ています。

◎下関市内には今何百人という子どもが不登校で苦しんでおります。私どもかんせいのほうにも80名近い子どもたちが来ています。中3の子についても、かんせい、それから秋根というのができまして、合わせて40名くらいの生徒がおります。それぞれに進路先を考えているのですが、その中で一番子どもたちの興味関心を引いているのが立修館さんです。3年前に理事長さんにお会いして、かんせいに2年前に説明会に来ていただきまして、それまで双葉（高校）への希望者が多かったのですが、その説明会でみんなが立修館を希望するようになって双葉のほうにはほとんど行かなくなったというのが現状であります。

さらに山田教頭先生とは若いころ歩道などで一緒に見回っておりまして、あの頃は生徒指導に苦しんだ時代もございましたけども、今はセーフティーネットになっているだけでなく、攻める姿勢にいかれて、先ほど見せていただきましたように長府中時代の子どももおりますけども、下関市立大に入れていただきまして非常にありがたく思っております。

それから、ある程度長いこと下関にいる人間にはわかるのですが、やはり若手の者についてはまだまだ分かっていない教員もおります。そこで、他の校長先生もおられるので、少なくとも下関市内の教育相談の先生には一度こちらで会場をお借りして研修なんかをしていただいで、立修館で実際に行われていることを教えてい

ただければと思います。例えば、ハイリーセンシティブパーソン、子どもの場合はハイリーセンシティブチルドレンと呼びますが、その言葉すら知らない教職員がおります。そういうことを知らないで上から目線で発言をする教員がたくさんおります。私どもの中学校の教員もそうですし、申し訳ないですが高校の教員にもおります。特に県立の教員は私の目線からすると見受けられます。こちら（立修館）のご努力、子どもたちをいかに活かしていくかの手法を、ぜひとも一般の教職員にも、下関市内の生徒指導部長さんもおられますので、そういう方々と連携をとってやっていけば、立修館さんだけではなくて下関市内の教職員のレベルアップにつながるのではないかと思った次第です。

【教育支援教室かんせい支援員 濱本誠治 委員】

【参考資料①】

地域連携委員会（山口地区）実施データ

○実施日時：令和4年1月27日(木) 14:00～15:30

○実施場所：立修館高等専修学校（山口県下関市小月茶屋3-4-26）

○参加委員：児玉典彦（下関市教育委員会教育長）

山田耕三（宇部市教育委員会教育支援課長同格）

波多野敏郎（山口県中学校長会幹事）

瀬下信二（下関市中学校長会長）

山本時弘（山陽小野田市中学校長会長）

濱本誠治（下関市教育支援教室「かんせい」教育相談員）

山本秀逸（山陽小野田市教育支援教室「心の支援室」支援員）

【計 7 名】

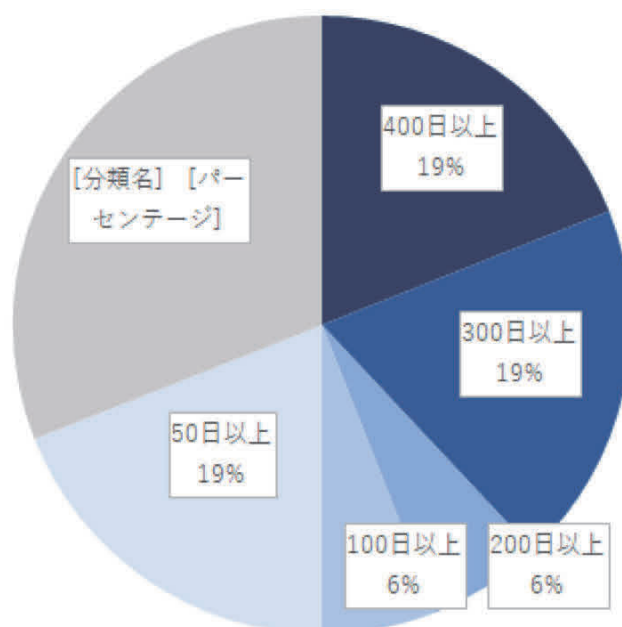
関谷豊（理事長）、山田靖治（教頭）、福田佳菜子（教員）、奥村翔太（教員）

【計 4 名】

【委員参加者合計 11 名】

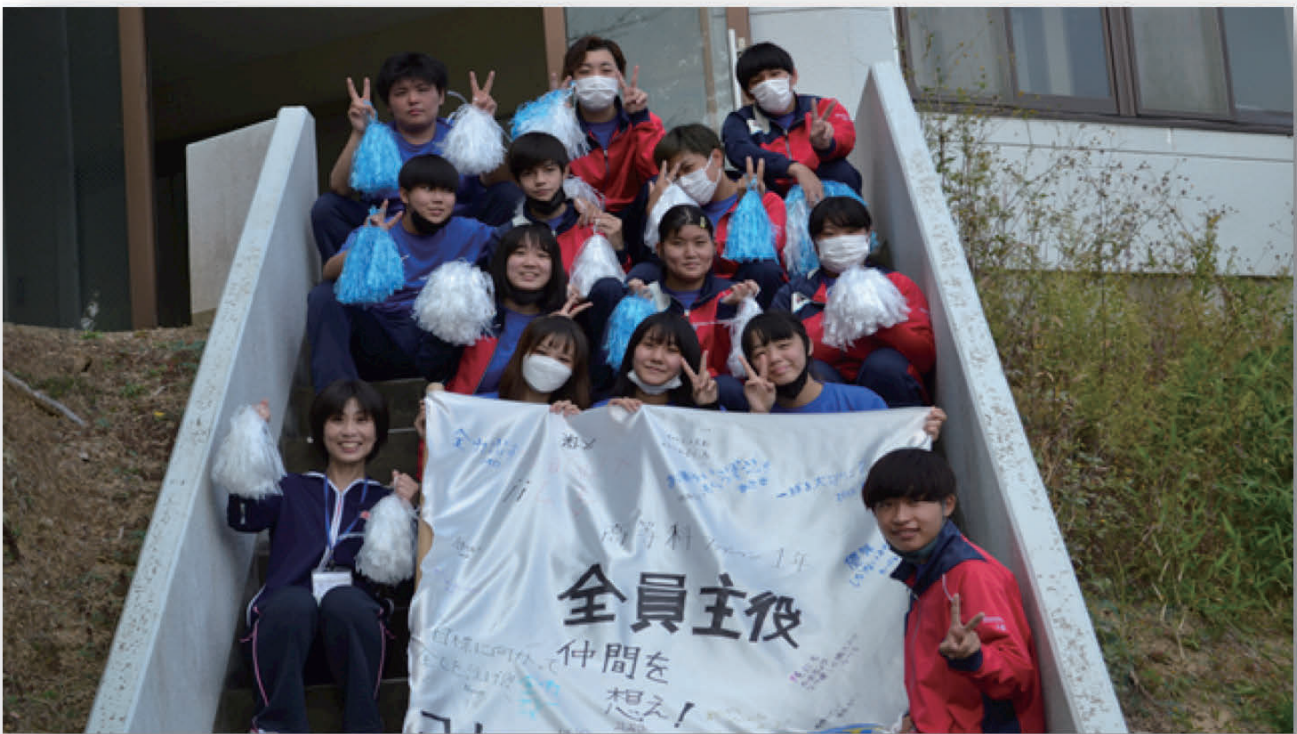
不登校だった生徒が登校 出来るようになった事例

中学3年間の欠席日数



※その他は学校内の特別支援教室で過ごすなど、教室に入れなかった生徒を含む





学校へ行けずに家でしていたこと

内向型

- ・ゲーム
- ・動画を見る
- ・家の手伝い

外向型

- ・カラオケ
- ・家出をした

立修館に入学して登校できた理由

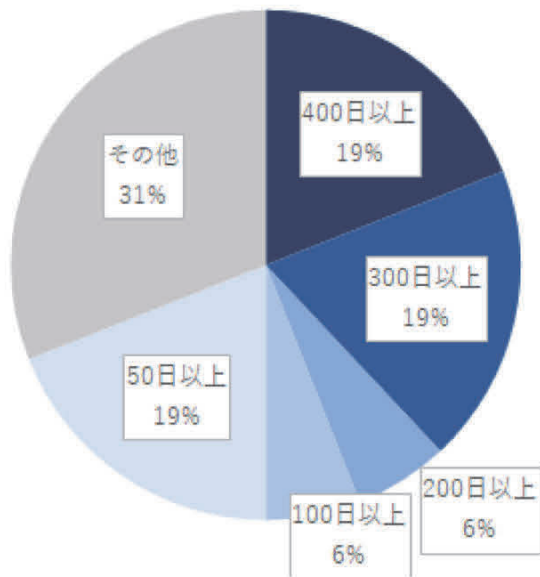
コミュニケーション

- ・絶対楽しい
- ・お互いに嫌な経験をしているから
- ・リーダーの存在

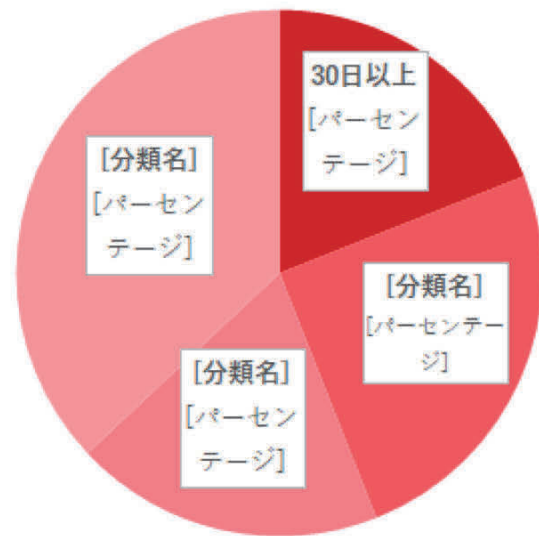
学習

- ・基礎的な授業
- ・「わからない」と言える
- ・馬鹿にしないで教えてくれる

中学3年間の欠席日数



入学後の欠席日数



発達障がいが改善された事例

中学校からの引継ぎ

- 教育支援計画（発達障がい）

提出物忘れ、宿題忘れ

授業中の私語、誰かにちょっかいを出す

関心のあるもの以外への取り組みができない

際立った授業妨害や迷惑行為等はない

入学後② 部活動

- 2年次・3年次に中国簿記大会で優勝

- フットサル同好会やeスポーツ部の立上げ

→初代部長(簿記部長と兼任)



入学後① 学習

- 特定の科目において優れた能力を持ち、積極的に資格を取る → 卒業までに簿記2級・Excel2級・電卓2級取得
- 学級委員や文化祭実行委員を自ら引き受ける
- 大学へ行くため苦手科目(国語・英語)や小論文の勉強も

中学校からの引継ぎ

- 教育支援計画（発達障がい）
 - 提出物忘れ、宿題忘れ → 改善
 - 授業中の私語、誰かにちょっかいを出す → 改善
 - 関心のあるもの以外への取り組みができない → 改善
 - 際立った授業妨害や迷惑行為等はない

入学後③ eスポーツ部の業績

全国高校eスポーツ選手権大会（国体）

※ 山口放送

・ 令和2年度

山口県大会優勝

中国大会準優勝



第4章 まとめ

今年度より新たに3か年の計画で取り組みが行われる本事業は、発達障害や不登校等の特別な配慮が必要な生徒を多数受け入れ、これらの生徒の学びのセーフティーネットに大きく寄与している高等専修学校において、教職員を中心としつつ、外部機関等との連携も含めた実効的な教育体制（「チーム高等専修学校」）の整備を推進していく事業である。昨年度までの3年間で実施された同事業では、それぞれの地域でのさまざまな連携を深める一方で、「チーム高等専修学校」として、各地・各校での独自の活動を情報開示し、共有し、課題抽出を的確に行うことにより、具体的な改善諸施策を検討することができた。特に、地域連携委員会での協議内容や報告は、他の地域でも連携体制「チーム高等専修学校」を構築するための参考書として、大いに活用できるものとなった。

昨年度までの事業成果を踏まえた今年度の事業では、全国の高等専修学校における「学びのセーフティーネット」機能の現状と課題を継続的に精査し、社会情勢により年々変化する地域差、更には全国共通の課題を明確にし、その課題を克服することによって、高等専修学校の機能高度化を改めて目指したいと考え、継続的な取り組みとして『高等専修学校の実態に関するアンケート調査』を実施した。調査方法に関しては、アンケートフォーム（Google）からのオンライン回答も追加し、回答率アップと集計作業の省力化を目指した。

今年度の実態調査で新たに追加・検討したテーマとして、高等専修学校の「社会的認知の向上」と、社会的認知の欠如から生じる大学入試における格差や私立高校との格差の広がりもあることから、「格差問題」の現状把握と課題の明確化を掲げている。アンケート調査項目の12～14が今年度テーマに沿って新設された項目である。特に大学や専門学校の入試に関する格差問題に関しては、各学校より様々な事例が報告された。大学等の対応に同様な事例が多く、我が校だけの問題ではなかったという共通の認識と、改善へ向けて関係機関への働きかけや、社会的認知向上を目指す新たな取り組みの根拠として活用できる内容となった。

地域振興分科会による『地域連携委員会』は、コロナ禍で対面での委員会開催が難しい中、全国6地域での実施が実現した。昨年度までの委員会実施ノウハウを用いて、今年度は新たに岡山県で委員会が実施された。昨年度の同委員会でも継続的な課題として見えてきた、地域内での高等専修学校の認知度、地域によっては特に中学校の若い先生方の認知度が低いというアンケート結果を受け、各地域で認知度アンケートの実施が進み、具体的な数字として高等専修学校の認知度の状況が明らかになった。また、連携先の委員との意見交換により、今まで明らかではなかった課題の抽出とその対策を考えるきっかけともなった地域もあった。

本事業では引き続き具体的な実態を把握する中で、より効果的な取り組みや共通した課題等を共有し、高等専修学校全体の共通認識として捉えながら、共通した課題には最終年度にどう取り組み改善していくか、地域連携による課題解決のモデルを提示し、高等専修学校らしい地域連携の形を打ち出す方針についての検討を加えていくこととしたい。

文部科学省委託事業
令和3年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
学びのセーフティネット機能の充実強化
高等専修学校の機能高度化に関する調査研究

高等専修学校の機能高度化に関する調査研究

事業実績報告書

学校法人大岡学園 大岡学園高等専修学校
令和4年2月

連絡先：〒668-0065 兵庫県豊岡市戸牧 500
学校法人大岡学園 大岡学園高等専修学校
TEL：0796-22-3786 FAX：0796-24-2282

●本書の内容を無断で転記、記載することは禁じます